

5 特定非営利活動法人映画保存協会

活動のテーマ：「蔵」再生：地域映像アーカイブの創設

活動の特徴

地域住民に親しまれている古い蔵を活用した地域映像アーカイブの実現



活動対象地域 東京都文京区ほか



キーワード

地域の文化は地域で守る

団体のミッション

映画フィルムを歴史文化遺産として保存継承できる社会の実現に寄与することを目的とする。

助成対象活動の背景

活動拠点を築100年の蔵付きの古い日本家屋に移転するにあたり、蔵を活用した地域密着型の映像アーカイブの創設を目指す。

この団体とは・・・

オリジナルの映画フィルムの保存継承を目指す専門家の集まり

活動の内容

- ・蔵の改修
- ・蔵を活用したイベントの実施

団体設立時期 2005年1月
代表者 永野 武雄
連絡担当者 石原 香絵
連絡先 住所 〒113-0022 東京都文京区千駄木 5-17-3

電話
FAX 03-3823-7633
E-Mail info@filmpres.org
ホームページ http://www.filmpres.org

1. 団体の設立経緯と目的

1) 地域や社会の状況・課題・ニーズ

後世に歴史を伝えるアーカイブ構築において、日本が極端に立ち遅れていることは意外と知られていない。福田康夫首相は、独立行政法人化された国立公文書館を再び国の機関として拡充しようと提言しているが、手元のデータによると日本のアーカイブの職員数は米国 2500 人、ドイツ 800 人、韓国 130 人に対して僅か 41 人。この数字は視聴覚アーカイブの置かれた厳しい現状にも当てはまる。東京国立近代美術館フィルムセンターは唯一の国立映画保存機関として 4 万本を超える映画フィルムを所蔵するが、研究員は僅か 6 名に過ぎない。国内の大手映画会社の中でも原版保存チームを持つのは角川映画 1 社に留まっている。世界有数の映画大国であるにもかかわらず映画保存への関心が薄く、活動内容も十分でないことは明白である。

2006 年、富士フィルムが 8 ミリフィルム事業撤退を発表したことに対し、映画監督ら約 300 名が反対運動を起こした。その結果フィルムの出荷を打ち切る計画は撤回され、現像サービス終了も先延ばしとなった。同年、近現代の日本を記録した写真の散逸を防ぐため、森山真弓元文相らが都内で会見し、写真の保存・管理の拠点施設の早期設立を訴えた。こうした出来事が示唆するように、文化喪失への危機感は社会的広がりを見せて高まっている。いかなる視聴覚メディアも低温・低湿の適切な環境に保管しない限り、経年劣化の進行によって遅かれ早かれ再生不能になる。再生機の枯渇や技術継承の遅れも深刻であり、重要性を認識されないまま廃棄された視聴覚資料の数も計り知れない。しかし未だ家庭の押し入れや物置の中には未曾有の映像遺産が埋もれているはずである。残念なのは、たとえ持ち主が残したいと願っても、残す仕組みが整って

ない日本の状況である。

NPO 法人映画保存協会 (Film Preservation Society, FPS) は、デジタル化の波に押されてフィルム遺産が消滅の危機にある中、地域に根付いた実践的なアーカイブ活動を目指している。活動拠点である谷根千 (谷中・根津・千駄木) 地区は、東京都心でありながら昔ながらの景観を残し、週末ともなると実に多くの人々が街歩きに訪れる。伝統的な祭事ばかりか新しい文化イベントも盛んで、地元の古書店、カフェ、アート・ギャラリーのオーナー、在住アーティスト、教会やお寺の関係者などが息の合った連携をみせる。この一帯には行政区にしばられない独自のコミュニティが形成されており、その文化的営みの核となっているのが、20 年以上に渡り地域雑誌を発行し続ける谷根千工房 (FPS 法人会員) である。

既に谷根千工房によって発見された貴重な映像は、鉄道省技術者による『欧州旅行』(1931 年 / 16 ミリ)、町内会の同好会による『わたくしたちの町ー 1955 年の池之端七軒町』(パチリ会映画部 / 1955 年 / 16 ミリ)、千駄木在住のアマチュア作家、故・熊沢半蔵氏の手作りアニメなど、枚挙に暇がない。熊沢作品にいたっては、その完成度の高さから国立近代美術館フィルムセンターに収蔵されてもいるが、地域性の高い映像を中央の大規模なアーカイブに集約することは、必ずしも最善の道とは言えない。ましてや市井の人々の残したホームムービーにいたっては収集対象から外されることも多い。地域の暮らしをあらゆる角度から記録した映像は、その地域に残ってこそ人々の宝となり、最大限に評価され、次世代へと受け継がれるものではないだろうか。



活動拠点としている古民家の入口



会員の手づくりの看板

2) 活動のきっかけ・目的

現 FPS 副代表の石原香絵が日本人として初めて L. ジェフリー・セルズニック映画保存学校を卒業して帰国した 2001 年 9 月、志を同じくする仲間と「映画保存研究会スティッキーフィルムズ」を結成。映画保存に関する情報発信を開始し、現理事長の永野武雄をはじめ徐々に新たな会員を集めていった。2005 年 1 月、より本格的な展開を目指して「映画保存協会」と改組改名、同年春に東京都台東区に事務所を構え、2006 年秋には NPO 法人格を得た。以下は設立趣意書よりの抜粋である。

映画が誕生して 100 年あまり、映画は時代を映す鏡として人類とその歴史をとともに歩んできた。しかしながら、それは映画の保存という面では受難の歴史だった。新たな作品が次々と生み出される一方でその媒体である映画フィルムの保存は見過ごされ、その間にも天災や戦災、さらには人災によって多くの貴重なフィルムが失われてしまった。商業映画ばかりでなく記録映画や個人のホームムービーにいたるまで、過去のあらゆる映像は歴史的資料としての価値を潜在的に有している。これらを保存し、未来へと託してゆくためには、行政や映画会社の努力に加えて《映画フィルムは文化財である》という意識を社会全体で共有しなければならない。

私たちはこのような現状を踏まえ、家庭に眠るフィルムの魅力を再発見し、保存を促進するイベント「ホームムービーの日」の実施や、失われた映画の発掘・復元、および映画保存に関する情報の収集・提供といった事業を行いその大切さを広く社会に訴えてきた。さらに今後はこれまでの事業に加えて映画フィルムの保



蔵の一階は 25 名ほどが入れる空間となっている

存に関する調査や情報提供及び映画保存の専門家の育成や行政・企業による映画保存事業の支援といった事業を行い、あらゆる映画フィルムを人類共通の文化遺産として保存継承してゆく社会の実現に寄与することを目指している。映画フィルムの一コマは私たちの歴史と文化を写したかけがえのない一コマであり、どんなに小さなフィルムでもそれを守ることは私たちの歴史と文化を守ることにつながる。

以上の活動を行うにあたって、活動の多くは長期的な継続によってはじめて成果を得られる性質のものであり、また市民の理解と協力を得るには社会的信用が欠かせず、また法人解散後の財産を公共のものとするためにも、任意団体や他の法人格ではなく、特定非営利活動法人の設立が妥当であると考えます。

2. これまでの実績

1) 眠っている映画フィルムの発掘・調査・復元・公開 《映画の里親》プロジェクト（市民の力で映画保存を！）:

[2005 年度]

FPS は喜劇の神様・斎藤寅二郎監督の現存する最古の喜劇『モダン怪談 100,000,000 円』（1929 年）を発掘し、この作品を復元するため、資金提供者を一般から募り、その方のお名前を復元版の冒頭にクレジットするという制度を考案した。斎藤監督の生誕 100 年に重なったこの年、監督のご子息 3 名が資金提供を申し出てくださいました。復元版は国際フィルム・アーカイヴ連盟東京会議をはじめ国内外で上映され、活動写真弁士の第一人者・澤登翠氏の弁士 35 周年記念イベントのオープニングも飾った。



スクリーンに蘇る懐かしの映像 古い街並みの一コマ

[2006 年度]

同じく FPS が民家から発見した『海浜の女王』（1927年 牛原虚彦監督）は、ロケ地のある財団法人鎌倉市芸術文化振興財団の資金と、牛原監督がかつて教鞭をとった日本大学藝術学部映画学科の技術協力を得て復元された。復元版は第五回京都映画祭でも上映された。

[2007 年度]

『学生三代記 昭和時代』（1930年）は立命館大学（マキノ・プロジェクト）及び国立近代美術館フィルムセンターの資金提供により、FPS 初のデジタル復元となった。第4作目となった『霧隠才蔵』は地元の若き活動写真弁士・坂本頼光氏より寄託を受け、映画の発掘・復元をテーマに据えたアジア初の映画祭（ソウル・チュンムロ国際映画祭）の資金で復元、同映画祭でお披露目上映となった。

《映画の里親》プロジェクトは新聞各紙や民放のワイドショーでも大きく取り上げられている。ユネスコの「世界視聴覚遺産の日」PR 映像にも採択され、2008年5月に開催される韓国映像資料院のリニューアル記念シンポジウムからも招待を受けている。

2) 映画保存を推進するためのイベントの実施

ちいさなフィルムのためのちいさな祭典《ホームムービーの日》:

家庭や地域に眠るフィルムを上映する世界的な記念日として、5年目の2007年には世界10カ国（米国・カナダ・ドイツ・オランダ・イタリア・スロベニア・日本・アルゼンチン・オーストラリア・ニュージーランド）65会場が参加。FPSは2003年より国内でこのイベントの普及につとめ、2007年には三沢・弘前・東京4会場・長野・名古屋・京都・大阪3会場・神戸

の13会場での開催を実現した。上映するのは小学校の運動会、学生時代の自主映画、家族旅行の記録など、地域の人々の持ち寄るフィルムである。FPSでは各地で上映された作品を1本ずつ東京に集めて上映し、広報用DVDも制作している。第6回はユネスコの「動的映像の保護及び保存に関する勧告」の採択（1980年10月27日）を記念し、2008年10月18日（土）に世界同時開催の予定であるが、既に各地から問合せが相次ぎ、弘前から尾道まで18名が各開催地の世話人候補として名乗りを上げている。一つ一つの会場の規模は小さく、趣向も異なるが、各地からの報告には共通点がある。それは、映し出される懐かしい風景に饒舌になる年配の参加者、現在の街の様変わりに驚きを隠せない若者、両親の幼い頃の姿を不思議な表情でみつめる子どもなど、集まった地元の観客の表情がみるみる輝き、知らないもの同志がいつしか会話をはじめるという点である。名もなき人々の残した映像の発揮する威力に、主催者自身が驚いている。

3) 映画フィルムの保存・活用に関する相談・支援小型映画部:

[主な活動内容]

(a) フィルムの内容・状態調査、(b) DVDへの映像変換／プロテレスィネ発注の仲介、(c) 各種機材レンタル、(d) 16ミリ出張映写（映写技師派遣）、(e) 映写機操作講習会をはじめ技術者ら専門家を迎えてのレクチャー、各種ワークショップ、上映会、関連施設見学会の企画・運営、(f) 小型映画の歴史的研究

2006年度には「NPO法人文京歴史的建造物の活用を考える会」、「財団法人日本ナショナル・トラスト」と連携し、地元・千駄木の保存建築・旧安田楠雄邸で発



会員による映写



簡易テレシネ（メディア変換）ワークショップ

見された8ミリフィルム33本の調査をおこない、撮影場所でもある旧安田邸で調査報告を兼ね、上映会を開催した。

[2007 年度作業実績]

フィルム調査8ミリ 83本、9.5ミリ 9本、16ミリ 1本、プロテレシネ発注代行 9本、簡易テレシネ 21本

4) 映画保存を知る・学ぶために役立つ情報の提供映画保存資料室：

会員が持ち寄った専門書、外部から寄贈を受けた書籍や映像資料を整理し、データベースをネット上で公開している（2008年4月現在、785点）。こうした資料に基づき、劣化フィルムの対処法、映画保存を学ぶための留学やフィルムの寄贈仲介など、引きも切らない相談に対応している。日本語の専門書がほとんど存在しないため、2005年度は『家庭でもできるフィルム保存の手引き [日本語版]』を出版。2006年度は財団法人番組放送センターが制作したレイ・エドモンドソン(著)『視聴覚アーカイビング:その哲学と原則』(ユネスコ)の和訳監修を担当。2007年度は東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイヴ連合(SEAPAVAA)が出版した『Lost Films of Asia』の日本の項目をFPSが執筆した。現在、全米映画保存基金が出版する保存技術ガイドブックの翻訳ボランティアをおこなっている。

3．助成年度の活動内容

1) 活動の概要(全体像)と詳細内容

プロジェクト名 「蔵」再生：地域映像アーカイヴの創設



蔵再生ワークショップ 1
お昼休憩に大工さんを囲んで

収集を伴うアーカイヴ活動に欠かせないのはスペースの確保である。広い物件を探す過程で、千駄木の築100年の蔵との出会いがあった。気温と湿度が比較的安く一定に保たれる蔵の特質をフィルム保存に生かし、恒常的な上映スペースを持ちたいというFPSの願いと、この蔵を守り残し、活用したいという地域の人々の願いが共鳴したことで、当プロジェクトを実践に移すことが可能になった。2007年春、台東区池之端の4畳半のアパートから事務所を移転。上記(2.これまでの実績)の取り組みに加え、蔵とそれに続く日本家屋の改修がFPSの重要な仕事の一つとなった。この蔵を拠点として、国内で今までにない地域密着型の映像アーカイヴの設立を目指している。

当初、草の根団体が無理なく維持管理でき、かつ地域の人々に親しまれる場を創設するには、使われなくなった古い建築を再生する方法が最適であると考えた。しかし建物の傷みは予想以上に激しく、相応の時間と労力、そして資金が必要となった。地域映像アーカイヴの創設プロジェクトははじまったばかりであるが、初年度がもっとも苦しい時期であったことは間違いない。故障していたトイレの改修、エアコンの設置、水道・ガス・電話線などの整備を経て、障子紙や襖紙の張り替え、大量に残されていた不要品のばらし作業と廃棄処理の手続き、映像関連機材(スクリーンやプロジェクターなど)の設置作業、書棚の取付けなどを進めた。会員は数ヶ月に渡り、仕事を終えた後の夜間や週末をつぶして修繕をおこなったが、この作業は予想以上に長引いた。努力が実り、事務所・上映スペース・フィルム検査の作業場などが次第にかたちになっていった。以後、蔵に貸出規定を設けて低料金での貸出業務も開始した。「訪れる度に何か変化がある」と、



蔵再生ワークショップ 2
床板の張替え

地元のお客さまにも改修過程を見守っていただくことができた。

11月には2日間にわたって蔵再生ワークショップを実施。古民家再生専門の大工・塚田一敏氏を迎え、蔵の前室の床板と壁板の張り替え、入口の扉の付け替えという大掛かりな作業を成功させた。このワークショップには会員に加え、地元の皆さんが多数参加してくださいました。現在も暗幕の取付けや照明器具の設置など、様々な改善作業が継続中であり、今後さらに手を入れなくてはならない箇所も数多く残る。

蔵スペースはときにイベント会場にもなる。イベントには小会主催／共催／協力のもと、外部貸出のものがある。しかし立ち合いボランティアとその交通費、光熱費など、基本的な維持費が確保できていない。蔵を活用していくチャンスは増えても、専任のスタッフが0名であるため、対応しきれない（お断りするしかない）悪循環に陥っており、宣伝を控えるしかない現状は残念である。当然、人の出入りがあれば建物はさらに傷み、修繕箇所も増えていく。蔵に「カンパ缶」を置いて寄付を募っているが、とりわけ2階の床板の傷みはひどく、イベントの最中に床が抜け落ちるという事故も起きた。瓦屋根のほりかえや蔵の扉の漆喰など、劣化の進行が深刻である箇所については、修理の目処が立っていない。

2007年度に開催した数々のイベントの中でも、1月の「餅つき大会と無声映画の会」はとりわけ好評を博し、FPSが《映画の里親》プロジェクトで復元した前述の『霧隠才蔵』を、フィルムの持ち主でもある坂本頼光氏の爽快な活弁と、やはり地元在住で無声映画伴奏の草分けである柳下美恵氏のキーボード演奏で楽しみ、お客さまに喜んでいただくことができた。こう

した活動情報は季刊会報のほか、月刊メールマガジン「メルマガFPS」を利用して発信している。メルマガ登録者は順調に伸び、2008年3月末発行の第34号は300部近くに達した（まぐまぐ232名、メルマガ66名）。

1) 蔵を活用した小会主催イベント

■ 4月22日（日）

第2回FPS映写機操作講習会

8ミリ&16ミリの映写機講習会 定員いっぱい
16名の参加

■ 4月29日（祝）

ちいさな上映会《一箱古本市編》

谷根千地区にお住まいだった熊沢半蔵さんの8ミリ短編アニメーション（DVD）と、本にまつわる16ミリのアニメーションを上映

■ 6月30日（土）

ちいさな上映会 もういくつ寝ると《ホームムービーの日》篇

■ 7月8日（日）

ちいさな上映会 番外篇 本駒込光源寺 千成ほおずき市 前夜祭

■ 7月16日（祝・海の日）

FPSゲストレクチャーVol.4 1940年代のカラーフィルム 講師：三隅繁氏

■ 9月30日（土）

ちいさな上映会 特別企画

雑誌『映画論叢』編集長・丹野達弥氏のコレクション



餅つき大会 1



餅つき大会 2

ンから、NY を舞台に連続殺人魔と刑事の駆け引きを描いたサイコ・スリラー『殺しの接吻』を上映

■ 10月8日（月）～12日（金）

芸工展の参加企画「D坂シネマ」（共催：谷根千工房）
テーマ【生き方・仕事（ワーク）】

■ 10月13日（土）

ホームムービーの日 2007《今年の本》上映会、ホームムービーの日世話人会議、懇親会

■ 11月10・11日

「蔵再生ワークショップ」（共催：谷根千工房／協力：たてもの応援団）

スタッフの報告（メルマガFPS30号より抜粋）：

両日、よみがえる古民家・恵古大工つかだの塚田一敏さんを講師に迎えてワークショップを開催しました。このワークショップによって蔵前室のリフォームが進みました。計16名の参加者の皆さまには心より感謝しております。床下の補強に床板の張り替え、そして窓枠に取付けたサッシなど、たった2日間の作業とは思えない仕上がりで、今後もこの蔵を精一杯活用していきますので、興味をお持ちの方はぜひ見学にいらしてください。引き続き蔵再生カンパも募集しております！ご協力をお願いします。

■ 11月17日（土）

FPS ゲストレクチャー Vol. 5 「映写のお仕事」[映写室編] 講師：横山真一氏

■ 11月25日（日）

ちいさな上映会「映画の里親」第4回作品『霧隠才蔵 [パテベビー版]』

■ 1月13日（日）

『初春 やねせん餅つき大会』

『初春 谷根千無声映画の会』（定員25名の蔵に35名の来場者）

来場者の声（メルマガFPS32号より抜粋）：

「大正、昭和初期の字幕フォントがすごくきれいでびっくりした」（40代会社員）

「思ったより（蔵の中が）あたたかくて驚いた」（30代会社員）

「弁士さんと音楽がばっちりあっていて最高」（50代主婦）

2007年度の反省から、2008年度は単発のイベントだけでなく、地元の文化イベントである「芸工展」実行委員の打ち合わせ、近隣の東京芸大の学生さんの楽器の練習、三味線や長唄のお稽古、琵琶の演奏会、ダンスチームの練習など、合鍵をお渡しして定期的・長期的に蔵のスペースを共用できるパートナーへの貸出に力を入れている。パートナーシップから得られる使用料で維持費をまかない、クレームの絶えない入口の照明改善、看板の設置なども実現していきたいと考えている。蔵の雰囲気を気に入ってくださる方は予想以上に多く、地元の方はもちろんのこと、神奈川など近県から足を運んでくださる方も、蔵の残されてきた経緯に興味をもってくださった。一方で、活用に至るまでの会員の努力や資金難はなかなか伝わらない。そのため、月刊メールマガジンFPSの30号より【けんこう蔵部通信】の連載を開始し、理解を呼びかけている。



無声映画会



ゲストレクチャー

2008年春には【第6回 不忍ブックストリートの一箱古本市】の会場に蔵が選ばれ、当日は数百名の参加者が蔵を訪れた。秋の芸工展会期中は既に全日予約で埋まっている。谷根千の街歩きの見学コースに選ばれるようになり、東南アジアや欧米から海外のフィルム・アーキヴィストの訪問も続いている。この蔵スペースがより有効に活用されるよう、様々な可能性を今後も探っていきたい。

2) 協力者・協力団体

谷根千工房（FPS 法人会員）とFPSとは、上映イベントや広報活動を共同でおこなうなど、2003年の「ホームムービーの日」開催以来、綿密な協力関係が続いている。角川映画（FPS 法人会員）の原版保存チームとは、映画保存にまつわる情報交換のほか、共同で施設見学会などを実施している。東京光音、育映社は《映画の里親》プロジェクトの復元に際して両社のラボに発注したことがきっかけで、技術協力、会員への指導をお願いするようになった。プロテレシネ（DVD変換）などの発注に際しては、FPSに特別割引を設定していただいている。

3) 活動推進にまつわるエピソード

エアコン設置の予算が蔵内の一基のみであったため、夏は40度近くの仕事場で気分が悪くなり、蔵の周囲で蚊が大量発生、そのほか害虫や鼠、雑草の駆除にも苦慮した。冬はいくら着込んでも手がかじかむ寒さで、お客さまをお迎えすることに躊躇することもあった。しかし、韓国の映画祭から招待を受けた際には「公的資金を受けていない草の根団体にここまでの活動ができるとは信じられない」と驚かれ、《ホームムービーの日》を統括する米国本部（CHM）からも「大



上映会での来客者たち

規模なアーカイヴの後ろ盾もなく国内13会場での開催は快挙である」と、お褒めの言葉をいただいた。国際フィルム・アーカイヴ連盟の発行するジャーナルから原稿依頼を受けるなど、地域映像アーカイヴ先進国の関連機関からは、後進国のユニークな取り組みとして常に注目を浴びている。

小型映画部の作業内容は、常にお客さま一人お一人の事情やフィルムの性質に合わせて、柔軟な対応を心がけている。法事の席で親戚一同に故人の映像を上映したいという方のために特別に納期をはやめたこと、戦時中に学生が記録したプライベート映像を、関係者だけのために蔵で試写させていただいたこともあった。谷根千で発見された大正時代の結婚式の映像を調べていくうちに、大阪の繊維問屋の創始者一族のものであることが判明し、ホームムービーの日に参加する関西のNPO法人に連絡を取り、大阪での上映が実現したケースもあった。

情報は公開しづらいものも多いが、FPSにしかできないきめの細かい対応を今後も心がけたい。

4. 活動の成果と課題

1) 目的・目標の達成度 自己採点

廃墟と化していた蔵は、たった1年で地元の人々の公民館的な役割を果たすまでになった。ゴールデンウィークの不忍ブックストリート《一箱古本市》や秋の谷中芸工展など、地域の文化イベントの会場としても活用されている。FPSはこの蔵に移転したことで、地域映像アーカイヴ設立準備室を設置するところまで辿りついた。職員0名のボランティア団体としては精



映写機操作講習会

一杯の努力を怠らず、100点満点の結果が出せたとは一旦は自負していたが、結果的には継続助成を認めていただくことができず、現在は会員一同、深く反省している。収集開始の時期は先延ばしとなるが、準備期間をもう一年いただいたと思って一層の創意工夫を目指したい。

2) 地域内外への波及効果

《ホームムービーの日》の開催を通して、国内のネットワーク構築は目覚ましく進展し、アートポリス大阪協議会、山形国際ドキュメンタリー映画祭山形事務局、尾道に映画館をつくる会、映画表現育成協会、世田谷映像保存再生の会といったNPO法人との交流が深まった。2008年には東京都台東区が地域映像アーカイブの設立準備を開始した。区長の所信表明には次のようにある。「生まれ育ったまちの情景は、誰にとっても忘れ難いものでございます。かつての街並や日常生活など、わがまちの歴史を記録した映像や写真は、貴重な文化資料であり、人々の記憶を呼び起こし、心に安らぎを与えるものであると考えます。私は映像アーカイブとして、まちの中に残る映像資源を発掘、修復、そして広く公開し、次世代に引き継いでまいります」。しかし文京区では未だ同様の取り組みは見受けられない。FPSでは文京区の視聴覚専用収蔵庫の寄託使用などについて、職員の方との話し合いをはじめている。既に16回を数えるFPS主催の「ちいさな上映会」では、2008年3月より、文京区所蔵の16ミリ・フィルムを古いものから試写し、不足している作品情報の補足調査を開始した。こうした試みを《ホームムービーの日》のネットワークを介して全国各地に広めていきたい。



ホームムービーの日

3) 活動の継続性

2008年4月の時点で個人会員数は24名となり、現像所の技術者、活動写真弁士、無声映画の伴奏者、映像関連会社の社員、テレビ・アーカイブの職員など、専門性の高い技術を持つ者が集まっている。従って、会員が資金を出し合い、週末を中心にボランティア・ベースの活動を継続することは可能である。しかし事務所の営業日は無理をしても週2から増やせず、職員0名の現状には限界を感じている。

4) 活動推進に活用した資源

初年度は蔵の整備に膨大な資金と労力をつぎ込む必要があり、助成なくしては何もかもが不可能であった。結果的に蔵は予想以上の注目を集め、各地で個性溢れる活動を展開する個人や団体とのつながりが生まれ、問合せや発注数は増加し、シンポジウムやレクチャーなどへの招待数も格段に増えた。しかし会員全員が本職をほかに持つことから、すべてには対応しきれず、敢えて宣伝を控えることも度々であった。

5) 課題と解決策

アーカイブ活動とは一過性のものではなく、地道な努力の長期的な積み重ねであり、成果が出るまでにはかなりの時間を要する。海外の地域映像アーカイブの成功例を具体的な目標としていたが、アーカイブ事業を収入源としている例はなく、日本だけでそれが実現できる見込みもないため、主な運営資金は寄付などに頼らざるを得ない。昨今、短期的な解決策でしかない手軽なデジタル映像アーカイブが「保存」という言葉に差し替えられてしまう事例は少なくない。文化財保護の原則であるオリジナルを未来に向けて残すことの意義は、建築や絵画の分野では常識となっているが、



フィルム・インスペクション講習

映像分野ではなかなか理解されない。確かにデジタル・メディアは便利なツールであり、アクセスの確保は欠かせない。しかし、オリジナルの形状（フィルム）を守る仕組みが大前提としてあるべきではないか。この意義をいかに訴え、いかに資金を獲得するかということが、FPSの今後の課題である。

5. 今後の展開

1) 団体や活動の理想的な方向性

組織体制としては、最低限1名の職員を雇えるようになることが理想であるが、そのハードルはとても高く感じられる。社会的意義のある活動であることを的確に訴える力量も不足している。しかし地域の人々、国内の映像関連団体、世界の映画保存組織との連携は非常にうまくいっている。かつて個人宅の貯蔵庫であった蔵を、この地に暮らす人々の記憶の宝箱として蘇らせることができると信じて、規模は小さくとも活動を継続していきたい。地域の過去の歴史を大切にしていける気持ちをわかりやすく伝えていく工夫、事業収入を得る努力も欠かせないが、同時に助成金への応募やスポンサー探しにも挑戦し、文京区（財団法人文京アカデミー*）との連携についても、積極的に企画・提案をおこなっていきたい。

* 財団法人文京アカデミー

文京区所蔵の16ミリ・フィルム等映像資料の管理をしている。現在、財)文京アカデミーを窓口にして、小会がそれらのフィルムを借り出して、フィルムの状態検査、補修、試写、カタログづくりを行っている。また、小会が開催する映写機講習会においても、財)文京アカデミーから講師をご紹介いただいたり、機材をお貸しいただくなど協力関係にある。